

コロナ禍における大学生の地域連携活動について

— 小学生とのオンライン交流会の事例より —

山岡 義卓

要 旨

今回のコロナ禍において横浜市港北区の小学生と本学の学生を中心とした大学生ボランティアが遠隔会議ツールを利用したオンライン交流会を実施した。大学生が毎回さまざまな交流企画（遊び）を考え小学生たちと交流した。学生たちはコロナ禍において他者とのつながりを求めており、本交流会により子どもたちや親など他者との交流機会がもてたことに意義を感じていた。家庭側も交流が限られている中で子どもたちに良い機会であったと感じており、多世代交流の意義等オンラインによる代替的な活動を超える積極的な意義も見出された。本交流会から危機における大学の地域連携においては、①学生の状況把握、②地域課題の把握、③コーディネート体制の構築の3つが重要であり、これらを担保するためには仕組みやルールだけでなく日ごろから地域との有機的なつながりを育むことが必要と考えられた。

キーワード：新型コロナウイルス感染症（COVID-19） 大学の地域連携
ボランティア オンライン

1. はじめに

新型コロナウイルスの感染（COVID-19）は我が国では2020年2月ごろより広がり、4月には緊急事態宣言が発出された。これに伴い多くの大学では前学期の授業開始時期を遅らせるとともに授業を遠隔で実施することや学生の入構を制限する等、それぞれに対応が取られた。教育・研究活動は従来とは異なる形で進められ、今もその状況が続いている。本稿執筆時において緊急事態宣言は解除されているものの、ウイルス感染が終息する目途は立っておらず、現状の「緊急時対応」が「常時対応」に変わっていく可能性もある。

こうした中、大学の重要な機能のひとつである地域連携活動も対応の変更を迫られた。変更といっても地域連携活動の多くは学外での活動を伴うものであり、少なくとも緊急事態宣言下においてはほぼすべての活動が停止を余儀なくされたというのが実情である。

地域連携活動をはじめとした社会貢献活動は大学の教育・研究両面にさまざまな意義のあることは多くが認めることであり、その役割は教育、研究に続く大学の「第3の使命」と位置づけられている¹。それゆえ今回のコロナ禍の制約下においても全国でさまざまな模索と実践が重ねられたはずであり、そうしたいくつもの実践の積み重ねの中からアフターコロナあるいはウィズコロナにおける大学の地域連携活動の位置づけを探っていくことが必要ではないかと考えている。

以上のような理由から、本稿では、コロナ禍において筆者が立ち上げと運営に関与した地域連携活動の事例「小学生と大学生のオンライン交流会」について、その経緯や影響等を報告するとともに、本交流会に基づき大学の地域連携活動の在り方について考察する。

¹ 中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像」（答申）（2005年）より

2 「小学生と大学生のオンライン交流会」について

2.1 概要

横浜市港北区の小学生と本学の学生を中心とした大学生ボランティアが遠隔会議ツールを利用したオンライン交流会（以下、本交流会と言う。）を2020年4月から7月にわたり計16回実施した。大学生が毎回さまざまな交流企画（遊び）を考え、小学生たちと交流する。参加人数は各回で異なるが、小学生は6～8家族（兄弟姉妹を含む）、大学生は4～5人であった。各回の交流時間は約1時間で準備等含めたプログラムはおよそ次のとおり。

- ①オンライン会議室にスタッフ集合
- ②スタッフ打ち合わせ（当日の進行確認）（約20分）
- ③参加者（子どもたち）集合
- ④挨拶・自己紹介（約10分）
- ⑤2グループに分かれて遊び企画（約40分）
- ⑥全員集合し感想のシェア（約10分）
- ⑦スタッフおよび親御さんとの反省会（約10分）
- ⑧スタッフ反省会・次回の確認（約10分）



図1 オンライン交流会の様子（パソコン画面）

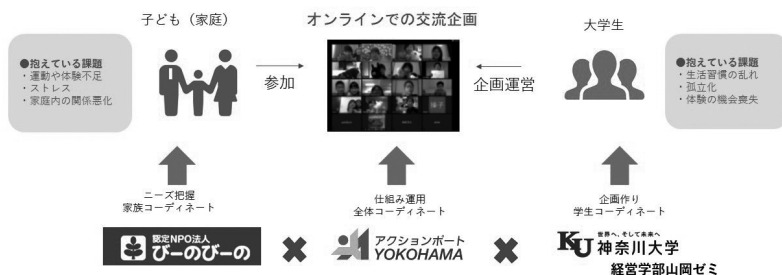
2.2 運営方法

小学生への参加募集は認定NPO法人びーのびーの（横浜市港北区）が担当し、毎回家庭に声をかけて事前に参加人数を確定させた。

学生ボランティアは当初より活動に参加した3人の学生を中心に毎回担当者数名を決めて企画を準備した。企画の準備にあたっては事前にオンラインによる打ち合わせ等を行った。なお、学生スタッフは本学学生のほか、NPO法人CFFジャパンおよびNPO法人アクションポート横浜の学生スタッフが参加した。

当日の会議室の運営や日程調整等全体のコーディネートはNPO法人アクションポート横浜が担った。

自粛による外出や教育の機会が限られ、窮屈な思いをしている子どもたちと大学生をつなぐことで、体験と交流の機会を作ります。またこの自粛が明けた後にもつながる関係性を育てていきます。



この企画は神奈川大学山岡ゼミ、認定NPO法人びーのびーの、NPO法人アクションポート横浜の3社連携企画です。

図2 小学生と大学生のオンライン交流会運営体制
(作図：アクションポート横浜)

2.3 経緯

本交流会の企画は、4月20日にアクションポート横浜の理事長やびーのびーのの事務局長を含むアクションポート横浜の理事らがコロナ禍におけるそれぞれの周囲の状況、すなわち子どものいる家庭においては学校の休校や親の在宅勤務等により友だちと会えず、家族といる時間が長くなっていること、大学生においては授業開始が遅れるとともにオンラインでの実

施となったことに加え、部活動やサークル活動が禁止され、アルバイトも実施できず一人暮らしの学生はほぼ誰とも会えないこと、地域活動に関しては外出自粛にともない、地域のほとんどの活動が中止や計画の変更を余儀なくされていること等について情報交換する中で大学生と小学生のオンラインによる交流活動の可能性について意見交換したことに端を発する。

その後、ただちにびーのびーにおいてオンラインによる大学生との交流に関して小学生のいる家庭にヒアリングを実施し、交流活動へのニーズがあることが関係者に情報提供された（4月24日）。これを受けて筆者よりゼミに所属する4年生にこうした企画の実施可能性を確認し、交流企画の検討を進めることとした。並行してびーのびーでは家庭に参加を呼びかけ、アクションポート横浜が中心となり運営方法や日程等を検討・調整し、4月27日に第1回の交流企画を実施した。びーのびーのからの情報提供の僅か3日後、端緒となった意見交換から1週間後のことであった。²

2.4 波及効果

本交流会はコロナ禍における交流活動として注目され、メディア等にその活動が紹介された³。危機においてはすぐに実施することが肝要であり、こうした活動の可能性をいち早く広めるためにはメディアを通じた紹介は有用であることに加え、ボランティアの学生たちのモチベーション向上にもつながったと推測される。このほかアクションポート横浜主催のフォーラム「コロナ危機における若者×地域活動」（7月31日開催）において学生たちが事例発表を行った。

² 活動開始までの経緯や学生側の状況については本学の「神奈川大学ノート」に「「会えない」から生まれた新たな「出会い」～小学生×大学生オンライン交流会」と題して紹介されている（2020年6月30日掲載）。<https://kanagawa-u.site/n/n18e37f256597>

³ 本交流会に関するメディア掲載

神奈川新聞5月11日付「休校の子 画面で交流 神大生ら 企画広がり期待」／フジテレビ系列5月13日放送「とくダネ!」 「子どもの“日常” いつ戻る 現役大学生によるオンライン学びの場」／タウンニュース港北区版6月4日付「オンラインでつながる 児童と大学生が交流」

3 活動の影響

3.1 調査方法

ボランティアとして本交流会の企画等に携わった学生および参加した小学生とその家族に対してウェブを用いたアンケート調査を実施し、参加した感想等を確認した。調査は2020年8月上旬に実施した。

3.2 調査結果

3.2.1 大学生

回答者数は9人で男4人、女5人、交流会への参加回数は6回以上2人、4～5回3人、2～3回4人であった。

本交流会に参加したことについて8人が「よかった」1人が「どちらかと言えばよかった」と回答した。よかった理由（複数回答）としては、「子どもたちと遊ぶ時間が楽しかった」が最も多く8人、「子どもたちが喜んでくれたり親御さんから感謝されたことが嬉しかった」が6人、「親御さんはじめ活動に関わる人たちと交流できた」が5人、「子育て家庭の様子を知ることができた」が4人であった。

交流活動に参加した感想（自由記述：抜粋）は次のとおりであった。

- コロナで逆に新たな繋がりが生まれるとは思っていませんでした。この交流会での繋がりは今後もずっと続いてほしいです。
- 企画を考える面では大変だったが、結果として子供たちに楽しんでもらえたり、親御さんにも感謝の言葉を言って頂けると嬉しい気持ち勝ち、参加して良かった、という気持ちが大きいです。毎回出来るだけ被らないように遊びを考えたり、内容も分かりやすいか楽しめるかを考えたりするのは大変に感じたが、それ以上に良い経験になったと思います。子供たちと関わる機会、親御さんと関わる機会、それぞれこのような場が無ければなかったのでこの時期に自分とは異なる世代の方と話す機会が持てたことも良かったです。
- 数回しか参加できなかったが、参加して思ったのは、大学生より小

学生の方が生き生きとしていてこちらが元気をもらった。学校の登校日が少ないので、今後もこのような子どもの自己表現の場があればいいなと思った。

- 普段だったらできないようなことを経験できたので非常に実りのある活動だと感じた。しかし、1回ごとに遊ぶ内容を一から練る必要があったため、少し負担を感じるが多々あった。
- 普段なかなか関わることがない児童と積極的に触れ合い良い経験を得ることができた。コロナ禍で遊びたい盛りの児童は苦しい思いをしたと思うが、少しでも楽しい1日を提供できたなら良かった。
- 私自身、授業の関係で数回しか参加できていないので寂しい気持ちでいっぱいです。そんな人間が発言するのは恐れ多いですが学生スタッフの人数に対して運営回数が多いのかなと思いました。毎回スタッフの人数を集めるのが大変だったのかなと思うので運営方法を再検討する必要があると思います。学生も学ぶことが非常に多い機会だったと思います。普段長い時間子どもたちとお話することがないため様々なことを吸収できたと思います。オンラインならでの企画もあり有意義な時間でしたが対面以上に距離を縮めるのに時間がかかるのだなとも感じました。オンラインは手軽ですが対面で接する重要性も今回学ぶことができました。残念ながら感染症の影響でイベントが中止になりましたが是非とも交流会に参加した子どもたちと対面でお話する機会があれば嬉しいですしやりたいなと思います。
- 人とあまり会わなくなっている中で、誰かと交流する機会が生まれて良かったです。外で行われるイベントとは違い、子どもたちの家での生活が垣間見えることが多々あり、新鮮でした。ゲームなどをする中で、子どもと学生で答えが綺麗にわかれることもあり、「確かに子どもの頃なら私も、子どもたちと同じ回答だったな…」とあったり、自分がもう忘れかけているような子ども目線の考えであったり世界に改めて目を向けることができ、いい機会になったと思います。また、子どもたちやその親御さんとの関わりが生まれた

のは勿論、学生同士が話すきっかけにもなったかなと思いました。オンライン講義だと、一緒に通学したり講義の間の休み時間に話したりということがないので、講義中にしか実際に会話することはなくなってしまいました。ですが、交流会の企画を考えるにあたり参加メンバーで電話をしたりすることで、あまり話さなくなってしまった同じゼミの子たちとの会話も増えたので、実際に子どもたちと交流をする前の準備段階でも、人との関わりというのが増えたのが良かったと思います。

- コロナ禍において、子どもたちと関わるボランティアなどに参加が出来ない状況で面白みのない日々だったが、このオンライン交流会はそんな退屈を忘れさせて貰えるものであり、子どもたちの笑顔が見られてとても安心しました。

3.2.2 小学生

回答者数は9人で学年は小学1年生が2人、2年生が1人、3年生が2人、4年生が1人、5年生が2人、6年生が1人であった。交流会参加回数は6回以上が5人、4～5回が3人、2～3回が1人であった。

本交流会の「楽しさ」を5点満点で評価した結果、5点（いつもとても楽しかった！）が7人、4点と3点がそれぞれ1人であった。楽しかった理由（単回答）は「いろいろな遊びができて楽しかった」が6人と最も多く「お友だちと一緒に遊べて楽しかった」が2人、「大学生と遊んだりお話しができて楽しかった」が1人であった。そのほか、「ゲームがいっぱいあっておもしろかった」「みんなと話せて楽しかった」等の回答が見られた。

本交流会に参加した感想（自由記述：抜粋）は次のとおりであった。

- またやりたい！リアルでも遊びたい！（5年生）
- 普段お話したことの無い大学生と話すことができて楽しかったです。ゲームもいつもとても面白かったです。ほかに参加している子達のこと何回か続けるうちに色々なことを知れました。（6年生）
- いろんなことがあそべて楽しかった。ちょっとながかった。（1年生）

- 今度こそ外で大学生と会えたら良いな。(3年生)
- 毎回色々なゲームやお話ができ楽しかった。(3年生)
- 体操とかゲームをしてたのしかったです。(2年生)
- 家から出られなくて退屈だったけど1時間でも楽しく遊べてうれしかった。(5年生)

3.2.3 家族

回答者数は6人で参加した子どもの学年は1年生2人、2年生3人、3年生1人、4年生1人、5年生2人、6年生1人(計10人)⁴であった。

本交流会に子どもが参加したことについては全員が「よかった」と回答し、その理由(自由記述:抜粋)は次のとおりであった。

- 何より子供が楽しそうに過ごしてくれてそれが一番嬉しかったし、大学生の本気で遊んでくれる姿勢も嬉しかったです。
- 下の子が人見知りで心配したが、回を重ねるごとに自分から発信できるようになって、最後には一人で参加することもできました。成長を感じました。
- 子どもたちが楽しかったと言っていたこと。親としては、世代を超えた交流ができたこと。子どもたちのために一生懸命考えて実行してくれた大学生たち、スタッフの方たちに出会えたこと。新しい時代になる、と言われているこの時期に新しい体験ができたこと。後ろ向きになりそうな時期に明るい話題が持てたこと。その他たくさんです!
- 自粛中他人との交流もなく、そんな中良い機会になり子どもも楽しみにしていた。異年齢交流も中々出来ないのが良かった。
- オンラインという新しい交流の仕方に子どもが馴染めるか最初は不安でしたが、子ども達が興味を持つような内容で、とても楽しむこ

⁴ 3人または2人の兄弟姉妹が参加した家庭があるため子どもの人数と回答者数とは一致しない。

とが出来ました。

- 事前の準備が必要な項目では、それなりにいろいろと調べたり学校とは違う楽しめる「宿題」が新鮮だったこと、親に対してではない人（同年代・ちょっと年上の方）へのそれぞれの接し方が見られたこと、どのようなクイズが得意か（理解できているか）、即興で何が出来るか、などなど、普段の親子の会話では見られない我が子の成長を感じられたことと、とにかく本人が毎回とても楽しみにしていたことから、親子ともに大変有意義な数ヶ月を過ごさせていただいたと感じています。

本交流会に子どもが参加した感想（自由記述：抜粋）は次のとおりであった。

- 頭が固いのでzoomのやり取りを想像も出来ないのも、もしお金を出して講座として参加する形ならやらなかったと思います。こんなにも子供たちが楽しくやり取りが出来たのは意外で視野が広がりました。自分が学生のときは小さい子なんて得体の知れない未知の存在だったので、お兄さんお姉さんには尊敬の眼差しをしています。いまは同年代どころか、同じ年で固まりやすく多世代交流が出来ない人が多いと聞きます。そんな中でこのような活動に参加できて子供達の宝物になると思います。
- 子どもたちは「遊んでくれる人」が大好きです。私はほとんど毎日勤務しているので普段もなかなか遊んであげることができないのですが、毎回楽しいゲームを、毎回同じメンバーでできたことがとてもよかったです。また、画面を通して伝えることの難しさも経験することができ、今後リアルな人との付き合い方の参考にもなったと思います。
- 後半は親が仕事になり参加出来ずに子どもは残念がっていました。親も子どものいつもと違う姿を見ることが出来て良かった。
- 初めての方たちと、実際に会わずにやり取りをして、うまく参加で

きるかなと心配でしたが、考えてくださったゲームやテーマがとても子ども達の興味をもつものだったり、ひとりひとりを気遣って進めてくれたので、とても子どもが楽しんで参加できました。

- オンラインの会議とはまた違って、ゆったりゆったりしたイベントだったと感じました。また、学生さんたちの子どもに対する優しさや対応方法から我が身を振り返る機会にもなり、画面越しではあるけれどもとても親近感を（勝手に）感じて、TVやYouTubeなど一方通行の画面を眺めるのとはまた違う「繋がり」に、この先の勉学や就職先など、みなさんのご活躍をただただ陰ながら応援したいと思いました。

4. 考察

4.1 活動の影響について

4.1.1 学生

学生は全員が「よかった」または「どちらかと言えばよかった」と回答しており、よい機会であったことが伺える。子どもと遊んだこと、子どもたちが喜んでくれたことや親御さんからの感謝、関係者との交流等他者と関わりがその理由として挙げられている。コロナ禍において他者とのつながりが絶たれていたことが背景にあると推測される。感想においても「この時期に自分とは異なる世代の方と話す機会が持てたことも良かったです」、「人とあまり会わなくなっている中で、誰かと交流する機会が生まれて良かったです」、「交流会の企画を考えるにあたり参加メンバーで電話をしたりすることで、あまり話さなくなってしまった同じゼミの子たちとの会話も増えたので、実際に子どもたちと交流をする前の準備段階でも、人との関わりというのが増えたのが良かったと思います」、「コロナ禍において、子どもたちと関わるボランティアなどに参加が出来ない状況で面白くない日々だったが、このオンライン交流会はそんな退屈を忘れさせて貰えるものであり、子どもたちの笑顔が見られてとても安心しました」等こ

うしたことを伺わせる記述が見られ、学生たちがこの時期に他者とつながる機会を欲していたことがわかる。

また、子どもたちを楽しませるために学生たちが一生懸命に工夫して準備してきたこともわかる。誰かのために自分が何かをして喜ばれるという関係が生じておりボランティアによる学習⁵がなされていたことが伺える。この時期、学生が参加できるボランティア活動はほとんどなく、その中でこうした機会がつくられたことは意義があると考ええる。

他方で運営に負担を感じていたスタッフも見られる。平時であれば時間をかけて予測される課題に十分対処してからスタートすればよいのだが、今回は準備期間がほとんどなく実施したことで運営上の課題を十分に検討、調整しながら進めることが難しかったためと考えられる。

4.1.2 小学生および家族

子どもたちにとっては「楽しさ」の評価や感想から楽しく遊ぶ時間を過ごすことができ意義のある活動となったことがわかる。

また家族の視点からも全員が「よかった」と回答しており子どもたちがよい時間を過ごせたと感じている。理由や感想からは、コロナ禍においてさまざまな活動が制限されている中で交流の機会が得られたということのほか、多世代交流ができたことや、双方向の繋がりを得られたこと、今後のリアルな付き合い方の参考になること、子どものいつもと違う姿を見ることが出来たこと、わが身を振り返る機会になったこと等、代替的な活動にとどまらず積極的な意義が見出されている。また学生に対して好意的な感想が多く、学生の感想と合わせて考えると両者の間に良好な関係が生まれていたことが伺える。

⁵ ボランティア活動の特性は自発性、無償性、公共性、先駆性の4つとされており（生涯学習審議会「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」（答申）1992年）、本交流会はこの4つのすべてを有している。また長沼（2008）によればボランティア学習の学習目的は「個の発達・変革」（実践を通じた学習者の成長、個人的資質の向上）と「社会の発展・変革」（より良い社会を創造するための担い手になる素養の獲得）の2つの面があり、アンケート調査の自由記述からこれらの学習効果を推測することができる。

4.2 大学の地域連携活動について

本交流会の経緯から危機における大学の地域連携活動において、次の3点の重要性が示唆される。

- ①学生の状況把握
- ②地域課題の把握
- ③コーディネート体制の構築

以下、それぞれについて説明する。

4.2.1 学生の状況把握

本交流会はそれぞれの現場における状況把握があって実施することができた。学生においては授業開始の遅れやオンラインでの実施、部活等の禁止等による他者との「つながり」の機会の喪失とそれを渴望しているという状況の把握が重要であった。新型コロナウイルス感染が拡大しはじめた時期は春休み中であり、また急遽決まったオンライン授業の準備に慌ただしく、大学側は学生の状況を十分に把握することは難しかったと推測される（この時期に大学が学生の「状況把握」のために実施したアンケート調査は主にはオンライン授業実施に向けての学習環境の確認等が中心であった）。筆者はたまたまゼミの学生たちから直接（ただしオンラインで）状況を聞くことができたものの、それでも経緯に記載したNPO関係者との情報交換の機会がなければそうしたことの重要性には思い至らなかったであろう。

4.2.2 地域課題の把握

他方でNPOから子どものいる家庭の状況について情報提供がなされたことも重要であった。大学が地域側の状況を把握できなければ適切な地域連携活動を行うことはできない。前述のとおり、今回はたまたまそのような機会があったが、情報交換の機会は平時でも定期的に持たれており、必然であったとも言える。

危機においてはそれぞれが緊急の対応をしており、情報交換等はいずれ後回しにされがちではあるが、危機においてこそ地域等周囲の状況に目を向けることで対応策を見いだせる可能性もある。とはいえ、危機だから情報交換をしましょうといっても適切な情報が交わされるとは思われず、日ご

りの関係があってできることであろう。日ごろから地域と有機的なつながりがあることで危機対応が可能となる。また、こうした関係は平時において発生する個別の突発的な課題等（小さな危機）への対応をも可能にすると考えられる。

大学の地域連携活動においては、連携の仕組みや学習効果、あるいは地域への波及効果だけでなく、おそらく定量的には評価できないであろうつながりを日ごろから作っておくことが必要であることがわかる。しかしそうした関係は、組織のルールの中だけでできるものではなく、教員や職員、あるいは学生ひとりひとりの地域の人たちとの小さなつながりの積み重ねとして形作られるものであろう。

地域社会の一員として危機に支えあえる関係が求められるとするならば、大学がその役割を果たすためには、仕組みとして、あるいは公式な活動としての地域連携だけでなく、ある種のアンオフィシャルな営みも含む日ごろの関係づくりに配慮していくことが必要と考える。

おそらく今回の危機に行われたいずれの地域連携活動もその土台には日ごろの関係があったと推測される。

4.2.3 コーディネート体制の構築

ここまで主に危機における状況把握の重要性を指摘してきたが、状況把握ができれば対応できるわけでもない。今回、全体のコーディネートアクションポート横浜が担っており、また、そもそも情報交換の機会は同NPOが提供したものであった。地域連携におけるコーディネートの重要性は平時においても危機においても変わらないが、危機においてはそれぞれが緊急事態である。そのような中で適切なコーディネートを行うためにはコーディネートのノウハウだけでなく危機に頼れる関係性が必要となろう。これも前述の状況把握と同じように日ごろからの営為がなければできないことである。大学がこうしたコーディネート機能を担えればよいだろうし、今回のように学外のリソースを積極的に活用することも考えたい。いずれにしても日ごろから相応しいコーディネート体制を構築しておくことが必要と言えよう。

以上、本交流会に基づき3つの観点から危機における大学の地域連携活

動について考察した。

なお、本交流会はあくまでもコロナ禍に対応した活動ではあるが、この活動がコロナ後の関係づくりや新たな活動に広がる可能性もある。本交流会でも関係者による対面による交流活動を計画中である。今後は、危機対応という側面だけでなく、危機にはじまったことを平時にどのように発展させられるかということを考えていきたい。というのも、危機において生まれたつながりは平時に生まれたもの以上に強固である可能性があり、新たな価値創出につながる可能性が高いと考えられるからである。

4.3 まとめ

以上、本交流会に基づく考察を整理すると次のとおりである。

- ①コロナ禍において学生たちは他者とのつながりを求めている。
- ②大学生との交流は子どもたちや家庭にとって良い機会であり、オンラインによる代替的な活動を超えて積極的な意義が見出されていた。
- ③危機においては学生の状況把握、地域の課題把握、コーディネート体制の3点が重要と考えられた。
- ④こうしたことを担保するためには仕組みやルールだけでなく日ごろから地域との有機的なつながりを育むことが重要と考えられる。

本交流会に限らず全国で行われた多くの実践からさまざまな示唆が得られていると推測される。アフターコロナあるいはウィズコロナにおいては、そうしたいくつもの事例を踏まえて大学における地域連携活動の位置づけや在り方を再確認したうえで、その推進体制や方法を見直すことも必要になると考える。

参考文献一覧

長沼豊, ボランティア学習における「学び」とは, 『新しいボランティア学習の創造』, pp145-217, ミネルヴァ書房, 2008年